設立 平成24年 5月15日
開塾 平成24年 9月 8日
発行 令和 6年 8月10日
(135号)

中之島ニュース

［事務局］ 〒567-0861
茨木市東奈良2-7-10
人間学塾・中之島
事務局　古田修平
編集長　西村俊幸

「新時代に求められる資質とは ～ホスピタリティ的生き方～」

高野 登 先生
（七月度特別講義より）

■根っこ理論

リッツ・カールトンは国内でも海外でも高い評価をいただいていますが、それは見えない「根っこ」を大切にする企業体質にあると思います。根っこは土の下で伸びますが、伸びてゆくのは「恵まれない環境」のときです。人間でいうと、へこたれない人とは苦しい時にしっかり根を張る人。肥料も水も与えられる甘やかされた植木は、少しの日照りでもだめになるのに、山の木々は厳しい環境を生きているのはしっかりと根っこを張っているからです。杉はご承知のように木材として価値が高く、一方、樅（ブナ）の木はあまり役には立たない。しかし、樅の木の根っこにはとんでもない力があります。一本の根に瘤のような貯水根がついており、そこに水を貯めている。樹齢数十年の樅の木一本に、貯水根にはなんと三トンから五トンの水を貯めることができるのです。一本の木がそれだけの水を貯えるからこそ、昔の山は崩れたりしなかった。いわば樅の木が山を守っていました。ところが戦後家を建てるために、樅のような木を全部切り倒し、みんな杉林に変えてしまった。だから何かあるたびに山が崩れるのです。人間に置き換えると、杉はかっこいい高学歴のエリート、樅は強かで手強い、地べたで頑張っているような人。リーダーとして指導してゆく立場では、素直な杉型人間の方が楽、樅型は一筋縄ではいかず大変かもしれない。しかし、こういった人間が集まれば、五年十年経ったときに必ずや良い組織になっています。人間力という視点で見ると、いろんな要素が必要です。雑木林はいろんな違った木があり、お互いに作用しあうからこそ山は強くなるのであり、それは組織も同じことが言えます。

■宿命・運命・使命・天命・寿命

目に見えるものと目に見えないもの、根っこは見えない心の部分です。かつて師匠から、人生にはコントロールできるものと出来ないものがあると教わりました。自分一人の人生でもコントロールできないことばかり、昭和何年に日本の地に生まれるなど自分では決められない。自分の命の宿ることに関しては誰一人自分では決められません（宿命）。生まれてきた命を自分がどこに運ぶか・運ばれてゆくかは、ある程度自分で決めることができる（運命）。運ばれた先で、自分の命をどのように使うのかを自分で考えることはできる。（使命）。そこで使命感に燃えて生きていると、天が認めてくれる瞬間がいずれやってくる（天命）。そしてなおも授かった命を喜び使っていると、天が寿いでくれる（寿命）。天から「よくやった」と褒められ、自分の人生の手じまいをしていけたら、こんな幸せなことはありません。

たいていの人が、自分の可能性を自分で決めてしまっています。自分の可能性をなめてはならない。こんなもったいないことはありません。

■リーダーの三要素

人も組織も動かすものではなく、これらは、主体的に自分の意志で目的地に向かって動くものです。動かされるのではなく、「動く」。リーダーが人を動かそうとすると、相手は動かない。しかし自然と皆が動きたくなるようなステージを用意したならば、必ずそこに活力が生まれます。それをするのがリーダーシップです。リーダーは、人が動きたくなる場面を作ってやりさえすればよい。

そのときにリーダーに絶対的に必要な三要素は、「愛」「勇気」「パッション（熱）」です。リッツ・カールトン創業者シュルツ氏から私たちはこれを叩き込まれてきました。この三要素で、どれだけの頻度で相手に向き合うのか。リッツ・カールトン大阪を開業するとき、シュルツ氏からこう尋ねられました。「こういうホテルにしていきたい」という夢を何回語り続けたなら周りが同調するだろうか？考えていた私にシュルツ氏は五〇〇回程度ならどこのホテルもやっている、と言いました。なぜリッツ・カールトンが短期間に世界一のホテルになったのか、それは自分が五千、一万と皆に語り続けてきたからだ、と彼は言いました。そこで自分も取り組んでみると、一日に三五回は語ることができるとわかり、毎日続けました。十ヶ月で一万回です。しかし二年経った頃もまだ変化は感じられなかった。ようやく三年目から変わりだし、四年目からは明らかに違い、五年目には日経ビジネスホテルランキングで一位を取りました。それも二位を大きく引き離しての一位です。これはリッツ・カールトンの企業体質である「コツコツ」、毎日コツコツ夢を伝え続けてきたことの成果だと思います。

リッツ・カールトンの創業者の口癖は「仕事はワクワクする。ワクワクしないのは仕事ではない」。その言葉のように仕事ができるということは幸せなことだと思います。シュルツ氏は昔話はしません。話題は常に未来に繋がることばかりです。これがいつまでも若くいられる秘訣でしょう。

みなさんへの質問です。これはリッツ・カールトンの会議の最後にもらう投げかけです。

「あなたという存在の何が周りの人を幸せにしているのですか？」

これを考えて仕事をしているのが、リッツ・カールトンなのです。

（抄録　中川千都子）

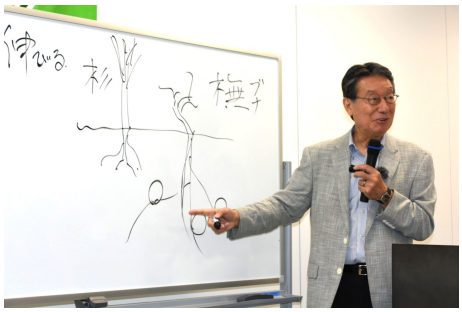
グループ討議　高野 登 先生　七月

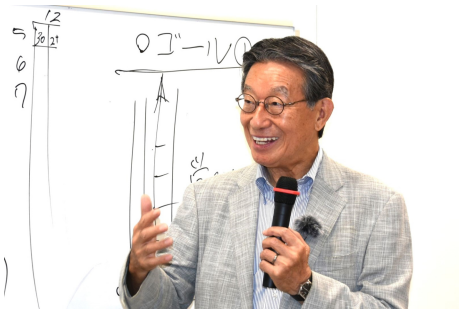
◇Ａグループ
・根っこ理論　ブナの木と杉の木の話
・リーダーは人が動きたくなるような場面をつくる
・リーダーの三要素
愛・勇気・情熱（パッション）

◇Ｂグループ
・根っこ　ブナと杉の違い
・毎日、コツコツ
・先味、中味、後味

◇Ｃグループ
・目に見えるものと見えないもの　ブナ、根っこ、Ｒｏｏｔｓ、セミ
・小さな違いを受け入れる
・宿命↓運命↓使命↓天命↓寿命

◇Ｄグループ
・根っこは苦しい環境で育つ
・自分の可能性を決めるのは自分
・あなたという存在の何が周りの人を幸せにしているのか





一言講話　嶋田泉世話人

懇親会　楽しそう・・・

塾生講話

理念とミッションと新卒採用にこだわって５４年　森 裕子 塾生

学びは楽しく長く　田中 橿子 塾生

人間学塾・中之島の大きな特色の一つであります塾生講話を開催しました。

今回は、東京からお越し頂いている森裕子塾生と、田中橿子塾生にご講話を頂きました。

まずは、産業廃棄物処理業の株式会社ハチオウの会長、森裕子塾生。

会社の理念からご苦労そしてこれからの夢までお話頂きました。伝えられる人になりたい、とのことでしたが、思いが十分伝わりました。人徳と愛があふれていました。

次に、出版会社登龍館の前社長田中橿子塾生。

ご主人様を亡くされ会社を継がれ、様々なご苦労を…さあ、これからという時に、乳がんに。がんになってよかった。そう思えるように…大手術の後、元気に回復！寿命のある限り学んでいきたいとのこと。

お二人とも会社経営とご経験の中、困難な状況を乗り越え、さらに今からの夢を語っておられました。塾生は非常に感銘をうけました。

お二人とも本当にありがとうございました。

寺田一清先生に導かれて⑲　近藤宏枝

「巨(おお)いなる人　森信三先生」

「人間学塾・中之島」では、いよいよ十二期を卒塾する日がやって参りました。一つの区切りとはなりますが、私達が学び続けることは、人間である限り終わりはありません。

そしてそれを「実践」してこそ、学びが日常で輝き生かされていくのだと思います。

さて塾が掲げる『塾是』の第一番目には、「森信三先生を始めとした先哲に学ぶ」と記されています。森先生は全国教育行脚の旅を八十才を超えられても続けられましたので、各地で様々な逸話が生まれていました。

ここに、私の住む古里で生まれた逸話をご紹介したいと思います。私が今から三十年程前に参加していた「共に育つ読書会」での出来事です。その読書会の指導者の石川直(ただす)先生は、直接森先生から薫陶を受けられていました。　ある日の会の前半はテレビ放映された森信三先生のビデオ鑑賞会になりました。約一時間でしたが、全員が姿勢を正し無言で、あたかも森先生に直接ご指導頂いている緊張感が、その場に拡がっているのを感じていました。鑑賞後に森先生の思い出話を、石川先生がして下さいました。

伊予三島（現・四国中央市）にお越し頂いた時のことです。何か記念に一筆と、直先生が、墨を磨るのに硯に水を入れていたら「水は、要るだけ入れること！」と、一喝されたそうです。以後、墨を磨るたび、その事を思い出し、余分な水を入れる事は絶対に無いと話されました。日常で生かされる教えこそ本物だと思いました。

その日観たビデオでは、森先生が二宮尊徳翁に送られた「この巨いなる生命よ　その肉体は遠く朽ちたれども　そのいのちは今もなを　わが内に生きてやまず」まさに森先生のいのちこそ、私達の身内に、今なお生きてやまないのです。

《人間学塾・中之島》次月日程

第十三期入塾式

◆日時　9月14日(土)13時30分～
（開始時間にご注意ください）

◆会場　大阪大学中之島センター6階　EF

◆内容　入塾式
オリエンテーション
各自メッセージ　～ひとり一分　など

写真は第十二期入塾式の様子です。

寺田一清先生メッセージ　中之島ニュースより

「人間学塾・中之島第二期生募集にあたり」

一，よき師よき友・人材の宝庫

さすがに、十四期にわたる名門「天分塾」の実績を受け継いだだけに、正に卓れた人材の集まりで、求道心に富み、かつ素直で親和の心に篤く、先日も郊外学習において先哲石田梅岩先生のふる里を訪ね、帰途「心学の道」を共に歩きましたが、しみじみそれを感じました。

二，老いも若きも和楽の世界

毎月の開講にあたり、一同起立し、「ああ中之島」を朗唱いたしますが、一・二・三の各章ともに、中之島塾の「三大心願」について、則ち、時間、空間、人間(じんかん)関係の正しき軌道への再生がこめられています。

三，一本筋の通った教えの継続

「塾是」の綱領に示されるように、森信三先生を始めとする人生の先哲に学ぶ姿勢の堅持について強調しております通りであります。今後も新たな塾生を迎えて、共に学び続けたいと、念願し一文を卓しました。

顧問　寺田一清

（中之島ニュース第11号平成25年8月号より抜粋）

芳信抄

第134号中之島ニュースを賜り、誠にありがとうございます。執行先生のお言葉、まさにその通り。講師の先生だけでなく、初参加される塾生の方々も感じると思うのです。中之島のお世話いただいている役員の方々と塾生の方々がつくられている空間は、「他所の団体と比較にならない」、本当にそう思います。その空間にいるだけで学びになります。

愛知県　坂部　智一様

中之島ニュース一三四号ご恵送いただき誠にありがとうございます。白駒妃登美先生のお話を聞き、いつも驚かされるのは、その学び方です。病気からの学び方、歴史上の人物からの学び方、自分では到底違う深い学び方です。自分の学び方がいかに浅かったか、お話を聞いているといつも恥ずかしくなります。執行草舟先生が常任講師になられたのですね。なかなか講演されない方が常任講師とはすごい会ですね　ユーチューブを見ていてすごい達人だと感じます。

愛媛県　桂　誠司様

編集後記

ご卒塾おめでとうございます。早いもので、いよいよ第十二期も終了。七月の高野登先生。「根っこは苦しい環境で育つ」「自分の可能性を決めるのは自分」すばらしいお話でした。

さて、上記、寺田先生のメッセージを過去の中之島ニュースから転載しました。十三期入塾を迷われている方、是非、ご一読ください。これからも一緒に歩んで行きましょう。流行り病はまだまだ猛威をふるっています。皆様、ご自愛ください。

編集長　西村俊幸